

戦争を神学する

—— ルターとボンヘッフアー

江口 再起

もちろん、戦争はいくら強調してもしたりないほど酸鼻なものである。しかし、酸鼻な局面をほんとうに知るのは死者だけである。「死人に口なし」という単純な事実ほど戦争を可能にしているものはない。戦争そのものは死そのもののほど語りえないものかもしれない。

中井久夫「戦争と平和についての観察」^{〔1〕}

一 ウクライナ戦争

ルターは、エゼキエル書を引きつつ、神は四つの災いを挙げているという。^{〔2〕}ペスト、飢饉、戦争、野獣である。野獣とは暴君のことである。この四つは、今日でもそのまま当てはまる。二二世紀の世界は事実、疫病に、

極端な経済格差に、そして戦争と暴君に苦しんでいる。

二〇二二年二月二四日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。ウクライナ戦争である。全世界に大きな驚きと怒り、そして悲しみが広がった。教会においても、そうである。常日頃、礼拝で平和の祈りが捧げられていたが、今ひとつリアリティがなかった……。だが現実には戦争が始まったのである。戸惑い。いったい、この戦争はどうなっていくのだろうか。そして、改めてそもそも戦争とは何であろうか。

ワテルローの会戦（一八一五年）でナポレオン軍と戦ったプロイセンの軍人カール・フォン・クラウゼヴィッツは、『戦争論（Vom Kriege）』を著わし、戦争について次のように言っている。「戦争は、政治的手段とは異なる手段をもって継続される政治にほかならない」。⁽³⁾では、異なる手段とは何か。彼は次のように言う。「戦争は一種の強力行為〔ein Akt der Gewalt〕である」。⁽⁴⁾

このクラウゼヴィッツの定義から、戦争について考察する際に、ポイントが二つあることがわかる。一つは、戦争そのものと言うか、その内実を形づくる政治・統治ということである。そして二つ目は、ゲバルト（暴力）の問題である。

さて、以下、戦争をめぐる神学的考察を試みたいが、まず第一にルターに関わりつつ「戦争」の全体を、そして第二にボンヘッファーに関わりつつ「暴力」について考えてみたい。

二 ルターと戦争

いつの時代も、戦争はあった。ルターの時代も、またその後も戦争は途絶えることはなかった。農民戦争、トルコ戦争、シユマルカルデン戦争、ユグノー戦争、三十年戦争等々。もちろん、当時と今日とでは状況が全くちがう。統治形態がちがう。ルターが生きていた時代は中世的な社会であり、近代的な国民国家でもまた住民全員が当事者である民主主義社会でもなかった。したがって戦争をどう把握するかについても、当然ちがいがある。また当時と今日とでは、宗教意識も、とりわけ終末感もちがう。とくにルターと戦争について考える時、この点は留意すべきであろう。

たとえば、一五二九年、イスラム教のオスマン・トルコがウィーンを包囲した。トルコ戦争の危機である。ルターも、このトルコの危機に際して関連文書を著わしているが、その一つに『ダニエル書への序文』（一五三〇年）がある。その中で、彼はこう語っている。「世界はまことにことに適つて、その終りに向かつて走り急いでいるので、我々が聖書の翻訳を終えるより先に、終りの日が到来するという強い念が私にはあります⁽⁵⁾」。ルターは終末の切迫を感じていた。それは当然、彼の戦争の見方に反映しているであろう。

もっともそのようなルターの聖書を背景とした終末感とはちがうが、我々の時代の戦争も、ある意味、終末感に満ちている。アウシュヴィッツのガス室、ヒロシマ・ナガサキのキノコ雲、はたまたグロテスクなほど急展開

している情報技術やグローバル化。つまり二〇世紀以降の戦争も、終末感ただよう戦争の様相を呈しているとも言えよう。⁽⁶⁾

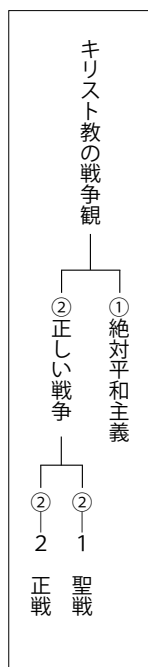
さて、改めて戦争とは何か。とくに本論考では、キリスト教は戦争をどのように理解してきたか、またどのように対処してきたか、を考えたい。とくにルターについて考えたいのだが、その前にキリスト教の戦争観の歩みと、考えるための枠組み（戦争論の分類）を記しておこう。

まずキリスト教の戦争観の歩みを、ごく簡単に振り返っておこう。⁽⁷⁾ 旧約聖書は神の名による戦争の記述が多く、今日から見ればきわめて好戦的である。イエスの福音は、言ってみれば「絶対平和主義」に満ちあふれている。続く初期のキリスト教徒は戦争に深く関与せず生活したが、四世紀以降、キリスト教がローマ帝国で公認されるに従いやがて戦争にも一定の役割を果たさざるをえなくなる。もちろんキリスト教である限り、基調はどの時代も平和の教えを大切にしてきたが、アウグスティヌスも中世のトマス・アクイナスも「正しい戦争」を認めた。しかし十一世紀に始まった十字軍はローマ教皇の主導で始まった。聖戦である。十六世紀の宗教改革の時代はどうか。ルターについては後で詳しく検討するが、絶対平和主義ではない。それに対して同時代のエラスムス（『平和の訴え』）や宗教改革急進派の中のある人々は平和の理想の下、今日の兵役拒否の思想の源流ともなっていた。その後も、ヨーロッパでは宗教戦争が続くが、ウェストファリア条約（一六四八年）以降、戦争はもっぱら世俗権力の仕事となる。では、こうした近代において、キリスト教は戦争にどのように対処してきたのか。もちろん、いつの時代も平和主義である。しかし、積極的に戦争に抵抗することはなかった。二〇世紀の二度の世界戦争においても、一部の例外（バルトやボンヘッファーの抵抗運動など）を除いて、キリスト教会

は静かに平和の祈りはしたが、結果として無力な沈黙が全体を覆っていたのである。

キリスト教の戦争観の歩みを見てきたわけだが、次に戦争を論じるに際しての戦争観の分類（枠組み）についてふれておきたい。くだいようだが、もう一度繰り返しておけば、いかなる場合も、キリスト教の教えは平和の教えである。しかし、現実には戦争がある。そこをどう見るか、である。戦争観の分類について、山内進（『正しい戦争』という思想⁽⁸⁾）に学びつつ、ここではキリスト教の戦争観として、もう一度、再整理しておきたい。

キリスト教は戦争をどう扱えたか。まず大きく①絶対平和主義と、②平和を祈りつつもある場合、神が命じたもう「正しい戦争」を認める立場と、二つに分類しうる。そして、その「正しい戦争」も更にその意義付けを考えてみるならば、②―1として、神の名において異教を成敗する「聖戦」と、②―2として、たとえば敵が侵略してきたときの正当防衛的な、いわば必要悪としての「正戦」と、二つに分けることができる。つまり、キリスト教の戦争観として、三つの見方に整理できるのである。図示しておこう。⁽⁹⁾



さて、ルターである。彼もまた戦争に直面し、苦悩した。農民戦争は、ある意味、彼自身が当事者の一人であり、トルコ戦争に際しては終末の到来さえ感じた。そこでルターはこうした事態を前に、いくつかの「戦争文書」を書いている。ここでは代表的な文書、『軍人もまた救われるか』と『トルコ人に対する戦争について』を

見ておこう。

まず『軍人もまた救われるか』（一五二六年）。一五二四―二五年の、封建諸侯の圧政に対する農民一揆（すなわち農民戦争）は、一説によれば農民の側に十万人もの死者をだす悲惨な結果をともなつて鎮圧される。その後、選帝侯ヨハンに仕える將軍アツサ・フォン・クラムは、キリスト者として、また軍人として、戦争が本当に正当化されるか否かを、ルターに問うた。その答えが、この著作である。ルターは、戦争の現実を、あるいは政治（統治）の仕組みをいわゆる「二王国論」を神学的土台として説いていく。「神は、二種類の統治を人間の間に設けられた。一つは剣によらないで、言葉による霊的なものであり……、もう一つの統治は、剣によるこの世の統治である」⁽¹⁰⁾。言葉による霊的統治は教会の仕事であり、剣によるこの世の統治（この場合、戦争）はこの世の権力（つまり支配者、政治家、軍人）の仕事である。では剣による戦争という場合、それはいかなる戦争なのか。ルターは言う。「剣は悪人を罰し、信仰者を守り、平和を維持するために神が設けられたのである。……戦争とは、不正や悪を罰するものである。平和と従順とを得るために人は戦争をするのである」⁽¹¹⁾。要約すれば、「正しい戦争とは、悪人を罰し平和を維持することである」⁽¹²⁾。もちろん、戦争には悲惨な現実がある。しかしルターは言う。正しい戦争は「大きな不幸を防ぐための小さな不幸」⁽¹³⁾なのだ。

『軍人もまた救われるか』についてまとめよう。第一に、ルターは「二王国論」を土台に戦争を論じる。第二に、ルターは「正しい戦争」を肯定する。すなわち「正しい戦争」は、悪を罰し平和を維持するために神が定めたものであり、この世的統治権力による剣の仕事である。その際、教会（霊的統治）の仕事は、そのために祈ることである。第三に、前述した戦争論の分類で言えば、ルターは「正戦」について語っていることになる。

次に『トルコ人に対する戦争について』（一五二九年）を見てみよう。一五二八年夏、オスマン・トルコのスレイマン一世の軍隊が、ウィーンに迫っていた。イスラム勢力が、キリスト教世界のヨーロッパの玄関先を脅かしているとみなされていたのである。こうした危機的状況下において、この文書は執筆された。戦争を論じるに際して、この文書においても当然「二王国論」が神学的前提になっている。筋書としてはこの通りであるが、この文書で二王国論に関してルターは面白い論述をしている。余計なことかも知れないが、引用してみたい。

「戦つてよい人」かかる人物は二人であり、しかも、ただの二人であらねばならないのである。すなわち、その一人はクリスティアヌス（キリスト者を擬人化した名称）¹⁴と言ひ、他の一人は皇帝カール（この世の統治者）である。¹⁴そして、クリスティアヌスを「第一の兵士」、皇帝を「第二の兵士」とする。そして次のように語る。

「第一の兵士、すなわちキリスト者は祈りをもつてそれ〔戦争〕に携わる¹⁵」。第二の兵士とはこの世の統治者であるが、彼が実際、剣をもつて戦う。その目的は、あくまで臣下（住民）の保護であり、名誉心や復讐心、領土拡大や財産であつてはならない。したがつて、対トルコ戦争は防衛戦であり、つまりあくまで「正戦」なのである。

さて、ここまでは『軍人もまた救われるか』と同じである。ところがこの『トルコ人に対する戦争について』は、ややそれ以上のことが語られている。あえてはつきり言えば、この文書には「聖戦」のニュアンスがしのびこんでいるのである。イスラム教のトルコ人は、キリスト教の敵であるという考えが、戦争の原動力の一つとなっている。ルターはこう語る。「トルコ人は噂によれば、悪魔の一下僕であつて、ただ単に国土や人々を剣をもつて滅ぼすばかりか、キリスト教の信仰ならびに私たちの愛する主イエス・キリストをも荒廃させるものである¹⁶」。そして更に、キリスト論にまで踏み込む。マホメットは「キリストが神の子であり、真の神であることを

否定しているのである」⁽¹⁷⁾。こうした論述は、今日の言葉で言えば、キリスト教絶対主義、つまり宗教的排他性と言えるであろう。

『トルコ人に対する戦争について』をまとめる。第一に、戦争を論じる土台は「二王国論」である。第二に、「正しい戦争」を肯定する。それは「正戦」である。しかし第三に、「聖戦」の影がしのびこんでいる。

さて、やや繰り返しになるが、ルターは戦争観をまとめておこう。(1)ルターは戦争観の神学的土台は、いわゆる「二王国論」である。ルターは「神の秩序 (Gottes Ordnung, göttlicher Ordnung, ordinatio Dei)」という言葉を使う⁽¹⁸⁾。(2)イエスの教えは平和の教えであるゆえ、キリスト教の戦争論は原理的にすべて平和主義である。しかし、それは必ずしも「絶対平和主義」を意味しない。ルターも絶対平和主義ではない。(3)ルターは、神が命じる「正しい戦争」を肯定する⁽¹⁹⁾。(4)つまり、それは「正戦」である。悪を罰し平和を維持するための戦争であり、今日的に言えば防衛戦である。更に言えば「大きな不幸を防ぐための小さな不幸」、つまり必要悪とも言える。(5)とはいえ、しかし又、ルターの場合、「聖戦」のニュアンスがしのびこんでいる。

三 ボンヘッファーと暴力

クラウゼヴィッツは、戦争は一種のゲバルト行為(暴力)であると言う。つまり戦争を考えると、「暴力」は最も大きなテーマの一つである。当然、ルターもそのことを知っている。戦争がもたらす虐殺等、悲惨な暴

力に満ちた現実に関心を抱き過ぎていた。しかし彼は言う。正しい戦争は、「大きな不幸を防ぐための小さな不幸」なのだ、と。そして一つのレトリックを持ち出す。「よい医者とは、病気がたいへん重くひどく、生命を救うために、手や足や目を切断し切開しなければならないとき、人がもしその医者の切り落とした手足を見ると、その医者は恐ろしい無慈悲な人であるように思える。しかし、……その医者は実はすぐれた誠実な人である」⁽²⁰⁾。この医者のメスのレトリックは、よくない。このレトリックで、暴力の問題が片付くだろうか。人はそれが差し迫った自分の問題でない時、案外簡単に結論をだす。そこでは悲しんでいる人が、自分でない「誰か」だからである。つまり、こうした「実存をすり抜けるレトリック」には、よくよく注意すべきである⁽²¹⁾。

そこで改めて暴力の問題を、戦争という現実を背景に考えてみたい。本論考では、暴力と言葉、そして暴力と罪責について考える。

まず、暴力と言葉の問題。ある暴力的事態が起こった場合、ルターは剣でなく、言葉で闘った。ヴィッテンベルク騒乱である。「九五箇条」の問題提起は、全ヨーロッパの宗教・政治体制を揺さぶり、ルターはにわかに時の人となる。その結果、ルターはヴォルムス国会で皇帝カール五世により自説の撤回を迫られるが、彼の身を案じたザクセン選帝侯フリードリッヒ賢公によって、人里離れたヴァルトブルク城に保護される（一五二一年五月）。ところがこのルターの不在中に、ルターが改革を進めていたヴィッテンベルクの町が騒乱状態になったのである。ルターの同僚カールシュタットやツヴィカウの預言者といわれる人々によって、改革と称して修道院襲撃や聖像破壊運動が、それこそ力づくで行われたのである。そこでルターは急遽、身の危険の中、ヴァルトブルク城からヴィッテンベルクに帰還した（一五二二年三月）。そこで彼は何をしたか。三月九日から十六日の連続

八日間、教会で説教をしたのである。これが有名な「四旬節の連続説教 (Invocavitpredigten)」である。つまり彼は説教の力、言葉の力によって闘い騒乱を静めたのである。ルターは説教の中で、パウロのアレオパゴスの説教(使徒言行録一七章)を例にとり、次のように語っている。パウロはアテネの町で偶像の祭壇を見つけたが、「一つも足げにして破壊などしなかった。むしろパウロは市場のまんなか立って語った。こうして、そのうちの一つをも力ずくで破壊することなどしなかった」。そして更に語る。「要するに、私はこのことを説教し、このことを伝え、このことを書く。しかし、なにびとをも力ずくで強要しようとは思わない。……私は免罪符と教皇派に反対したが、いささかでも力ずくではしなかった。私が眠っている間に、私が友人フィリップ(メランヒトン)やアムスドーフといっしょにビールを飲んでいた間に……みことばが全部行い、成就させた」⁽²²⁾。

ルターは言葉の力、説教の力、神の言葉の力によって事に処したのである。⁽²³⁾これはイエス・キリストの方法である。イエスは逮捕される時、次のように語った。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕えに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕えなかった」(マルコ福音書一四章四八―四九節、新共同訳)。

ところが、他方、このルターが暴力を煽る。農民戦争のときである。農民戦争の背景や経過については、複雑な事情がある。最初、農民に同情的であったルターだが、事態が殺人、略奪に及ぶや、領主側に立ち徹底した弾圧をすすめる。彼はパンフレット『農民の殺人・強盗団に抗して』の末尾を次の言葉で締めくくると。農民を「刺し殺し、打ち殺し、絞め殺しなさい」⁽²⁴⁾。これ以上、暴力に満ちた言葉はない。剣の力が、言葉の力を押しのける。ルターの悲劇である。

さて、次に暴力と罪責の問題である。罪責 (Schuld)、罪と責任の問題である。ルター派の神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーについて考えたい。彼こそは、暴力に最も実存的に直面した神学者である。戦時下の限界状況 (Grenzfall) とはいえ、ヒトラー暗殺計画に加担し、未遂におわり処刑された (一九四五年四月)。彼の場合、戦争遂行のための暴力でなく、むしろ逆の戦争阻止 (抵抗) のための暴力である。しかし、殺人は究極の暴力である。

一九三三年一月ヒトラーは政権を獲得するが、その年の四月、ボンヘッファーは一つの講演をしている。「ユダヤ人問題に対する教会」である。⁽²⁵⁾しかし、ここで考察したいのは、ユダヤ人問題ではなく、講演の中にてくろる国家と教会の関係についての、ある譬で語られている考え方についてである。ボンヘッファーは、交通事故 (車の暴走) について語る。彼は三つの段階を想定する。第一に、車は事故が起ころぬように、常日頃から「点検」すべきである。第二は、しかしいざ事故が起これたら、なすべきことはまず何をおいても犠牲者の「救助」である。しかし第三、車はなおも暴走している。どうすべきか。ボンヘッファーは、その暴走車を「阻止」せよと言う。整理しよう。第一段階は、こうした事態について、常日頃からよく「考える」ということである。第二段階は、しかし事故が起これたら、犠牲者を「助ける」ということである。そして第三段階は、暴走車を「止める」ということである。そして、ここにある場合、暴力が顔を出す。

この交通事故の譬は、ボンヘッファーの未来を暗示している。ヒトラーがポーランドに侵攻し第二次大戦が始まったのは一九三九年であるが、ボンヘッファーがこの講演をしたのは一九三三年のことである。予兆に満ちていたとはいえ、まだ人々はヒトラーの独裁や戦争やユダヤ人問題について、深刻に考えていなかった。しかし、

ボンヘッファーは「考えて」いた。そして、ユダヤ人を始め犠牲者の「救援」を想定していた。そして暴走車を「止める」ことを、つまり暴力を自らが実行することを、心の深いレベルで知っていたのではなからうか。

未遂に終わったとはいえ、ボンヘッファーは暴力に加担した。これをどう考えるべきか。ヒトラーや第二次大戦の現実と結末を後々にではあれ知っている者にとっては、ボンヘッファーの行為は「勇氣」ある「殉教者」のそれである。もちろん、その通りと言えよう。しかし、そこを更に踏み込んで考えねばならない。なぜなら、ボンヘッファーは、自らのこの行為を信仰的な「勇氣」の問題としてばかりでなく、むしろ「罪」の問題として考えていたからである。

ボンヘッファーは一九四三年四月に逮捕されるが、その少し前一九四二年十二月に、「十年後」という深い自己省察の覚え書を書いている。そこに罪と罪責の問題がでてくる。彼はこう書く。「確固として立つ者は誰であろうか。それは…その生が神の問いと呼び声に対する答え以外の何ものでもないことを望む責任的な人間だけである。そのような責任的な人間はどこにいるのであろうか⁽²⁶⁾。そして恐らくは自らの暗殺計画をも頭に浮かべつつ、こう書く。「殺人の禁止のような」定められた限界を越える「という」……この違反をおそらく不可避の罪責であると自覚する⁽²⁷⁾」。ヒトラー暗殺、すなわち殺人は罪である。しかし、責任的な人間とは罪を自覚し引き受けること (Schuldübernahme) だ、とボンヘッファーは言うのである。罪責である。すでに一九四〇年ごろから書き始め、死後、ベートゲによって整理された『倫理』の中で、ボンヘッファーは、はっきりと次のように書いていた。「責任ある行動の構造は、罪を引き受ける用意と自由とを含むことによって成り立つ⁽²⁸⁾」。

さて、再度、問う。ボンヘッファーのこうした思想と行動を、どのように理解すべきだろうか。カール・バル

トは、『教会教義学』の「創造論」で、「人間的な生命は第二の神ではない」と言明し、「生命の擁護は、…神がそのことを欲し給う時には、放棄され、破砕されてしまわなければならないということがありうるのである」と言っている⁽²⁹⁾。その上で、バルトはボンヘッファーについて次のように語る。「全体を救うために、自分の個人的な責任の事柄として取り上げ……彼自身の生命を賭けて、あの、一般の人々にとって危険な人間を取り除くために、換言すれば殺害するために歩みだすことは許されないであろうか。……これらの問いは、我々自身の時代にルター派の神学者ディートリヒ・ボンヘッファーによつて肯定的に答えられたのである」⁽³⁰⁾。そして、どうなるのか。バルトは続けてこう書く。「しかし彼〔ボンヘッファー〕は恐らくそれらの全てのことの中で、完全に孤独であるであろう。ただひとり現在の状況についての彼の見方をもつて、ただひとり彼の判断をもつて、ただひとり彼の良心をもつて、換言すれば、神の誠めの聞き手として、最後にただひとり彼の行動をもつてそこにいるであろう」⁽³¹⁾。

「ただひとり、そこにいる」とバルトは言う。ボンヘッファーは、ただひとりになった。よりルター的に表現すれば、「ただひとり、神の前に、罪人として、立つ」ということであろう。さて、そこでどうなるのか。ボンヘッファーは明確な答えを持っていた、と思う。なぜなら彼は、責任とは罪を引き受けることだと語り、続けて次のように書いているからである。「イエスは、自分自身が善くあることにも関心を示されなかった（マタイ一九17）。イエスにとつての関心事は、ただ現実の人間を愛することであつた。それゆえに彼は、人間の罪との交わりの中にも入り給うたのであり、彼らの罪の重荷を彼自身に負い給うたのである。……歴史的事実において、人間に対して責任を負う行動をなし給う方として、イエスは罪ある者となる」⁽³²⁾。

罪人になる。イエスが罪人となる。罪の連帯。イエス・キリストのことを語るこの意味が、ここにある。

四 今後のために——ルターを越えていく

本論考は、ウクライナ戦争から出発して、ルター、ボンヘッファーとめぐり、そしてキリスト論にまで辿りついた。しかし、戦争については、考えるべきことがあまりに多い。今後の課題を最後に簡単に記しておきたい。その際、ルターを学ぶ者として、常にルターが念頭にある。しかし当然のことながら、どのような人であれ、その人は時代の中で生き、考え、発言する。ルターもそうである。したがって、今の時代の中で生き、考え、発言する者にとって大切なことは、ルターを越えていくことだと思う。三点、考えたい。(1)二王国論の問題、(2)核の問題、(3)絶対平和主義の問題、の三点である。

(1)二王国論の問題。ルターはこう語っている。「すべての人間を二つの部分に分かたねばならない。第一は神の国に属する者、第二はこの世の国に属する者である。……それゆえ神は二つの統治を定めたもうた。キリストのもとで聖霊によってキリスト者、すなわち信仰深い人々を作る霊的統治と、キリスト者でない者や悪人を抑制して、欲しうが欲しまいが外的に平和を保ち、平穏であるようにするこの世的統治とである」⁽³³⁾。いわゆる「二王国論 (Zwei-Reiche-Lehre)」である。課題が二つある。一つは、ルターの二王国論を正しく理解すること、そ

して第二に、その上に立ってその問題点について検討批判することである。まず、ともかく正しく理解することが大事である。というのは、しばしば誤解がみられるからである。ルターが言わんとしていることは、「教会（神の国）」対「国家（地の国）」ということではない。「神の国（神の支配）」対「地の国（悪魔の支配）」という大きな枠組がまずあって、その中で神の国は具体的に「霊的統治（教会）」と「この世的統治（公共権力）」とによって保たれる、ということなのである。³⁴

さて、その上に立って、ルターの二王国論の問題点を検討することが大切である。言うまでもなく、ルターは中世末期の人である。その時代の秩序の感覚や、それに伴う今日から見れば権威主義な考え方、更には前述したようにルター独特の終末感（ある場合はペシミズム！）がある。またルターは「霊的統治」と「この世的統治」と言うが、現代世界のこの錯綜した現実の中で、それはあまりに単純すぎる立論ではなからうか。いや、そもそもルターは大きく「神の秩序（Gottes Ordnung）」と言うが、今日、「秩序」とは何か、「神」とは何か、更なる熟慮が必要である。現代世界への深い洞察に基づいた新しい「公共の神学」が必要である。

(2)核の問題。戦争を論じるそもそもの前提が、一九四五年八月六日と九日で完全に変わった。原子爆弾である。ルターは「正しい戦争」の論拠として医者メスと言うが、原子爆弾は世界のすべてを壊す武器である。医者メスは患者の足を切断するかもしれないが、原子爆弾はすべてを無に帰す。比較できない。局面が変わったのである。「正しい戦争」は、空論になった。さて、この時、ヒロシマ、ナガサキ、そしてフクシマを体験した国の責任は重大だ、と思う。「核の神学」は、日本のキリスト者の間違いなく最も大きな課題である。³⁵

(3)絶対平和主義の問題。初期キリスト教時代を除いて、キリスト教は意味付けは微妙にちがったとしても、ア

ウグステイヌス、トマス、ルターそして二〇世紀のラインホルド・ニーバーに至るまで「正しい戦争」を認めてきた。しかし、とりわけ二〇世紀以降の戦争の現実をみると、改めて問わねばならない。「正しい戦争」など、そもそもありえるのか。むしろ、キリスト教は絶対平和主義に徹すべきではなからうか。改めて、平和の訴えに耳をすます必要がある。カント（『永遠平和のために』）、ガンジー（『アヒンサー（非暴力）』）、トルストイ（『要約福音書』）、マーティン・ルーサー・キング（ワシントン大行進）、内村鑑三（『非戦論』）、そして日本国憲法第九条……。

そして、言うまでもなく中心はイエスの教えである。山上の説教（「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」〔マタイ福音書五九、新共同訳〕や、隣人愛の教え（五四）、「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ福音書二六五二、新共同訳）である。もちろん「聖書」にも、イエスの言葉の中にも、平和の教えとは必ずしも読みとれない箇所もある。しかし様々な言葉があるにしても、イエスの言葉（教え）の「可能性の中心」から、理解すべきである。それが「聖書」を読み解釈する意味であり、鉄則である。

絶対平和主義は、理想論にすぎず、「平和ボケ」であるという声も聞こえてくる。そうだろうか。むしろ今こそ、絶対平和主義という理想の火をあかあかと掲げつづけるべきではなからうか。私は、そう思う。「平和の神学」こそ、人類最後の神学である。

注

- (1) 中井久夫『日本社会における外傷性ストレス（中井久夫集9）』、みすず書房、二〇一九年、四頁。
- (2) M・ルター「マグニフィカート（マリアの讃歌）訳と講解」『ルター著作集』第一集4巻、内海季秋訳、聖文舎、一九八四年、一五八頁。エゼキエル書一四章二一節参照。
- (3) クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』篠田英雄訳、岩波文庫、一九六八年、一四頁。
- (4) 同上、二九頁。
- (5) M. Luther, WA DB II (II), S. 381.
- (6) 残念ながら二〇世紀以降の戦争に関しては、本論考では十分に論じていない。なお、多木浩二『戦争論』岩波新書、一九九九年、西谷修『夜の鼓動にふれるー戦争論講義』東京大学出版会、一九九五年参照。
- (7) 野々瀬浩司「ルターの戦争観と現代」日本キリスト教文化協会編『宗教改革の現代的意義ー宗教改革500年記念講演集』教文館、二〇一八年所収を参照。
- (8) 同上、一二三ー一二四頁。また『岩波キリスト教辞典』の「正戦」、「聖戦」の項目を参照。
- (9) なお、本論考で区別している「正しい戦争」も「正戦」も、欧米語では同じ単語である。(ラ) iustum bellum (独) rechter Krieg (英) righteous war, just war, good war. なお「聖戦」は(独) heiliger Krieg (英) holy war (アラビア) jihad.
- (10) M・ルター「軍人もまた救われるか」『ルター著作集』第一集7巻、神崎大六郎・徳善義和訳、聖文舎、一九六六年、五六〇頁。ただし訳一部変更。
- (11) 同上、五五四ー五五五頁。
- (12) 同上、五五八ー五五九頁。

- (13) 同上、五五五頁。
- (14) M・ルター「トルコ人に対する戦争について」『ルター著作集』第一集9巻、石本岩根訳、聖文舎、一九七三年、二六頁。
- (15) 同上、五五頁。
- (16) 同上、三二頁。
- (17) 同上、三四頁。
- (18) 同上、四五頁〔Luther, W., S. 2133〕や、『アウグスブルク信仰告白』第一六条「国の秩序とこの世の支配について」参照。
- (19) なお「正しい戦争」という言葉に関して、それが「正しい戦争」なのか、「法に従った戦争」なのかについて、しばしば議論になる。しかし、そもそもラテン語の *ius* は「法、正義、権利・義務」などの意味を含む言葉であり（他の言語でも、ほぼ同じ）、どの意味が強くなるかはその言葉が使用された際の、時代状況、文脈から判断する他ない。鈴木浩『アウグスブルク信仰告白』第一六条の「正しい戦争を行う」について『ルター研究』別冊3号（宗教改革500周年とわたしたち3）、ルター研究所、二〇一五年所収、参照。
- (20) M・ルター「軍人もまた救われるか」、前掲書、五五五頁。
- (21) 「実存をすり抜けるレトリック」の一例。神が正義であるのに、なぜこの地上に悪があるのかという「神義論(Theodicee)」を問うたライブニッツは、こう答えた。「少々酸っぱかったり辛かったりするほうが、砂糖（の甘さだけ）よりもしばしば気に入られる。陰影が彩りを引き立てる。不協和音も然るべく発せられれば音楽的調和を浮彫りにする……。小さな悪が善を一層際立たせ、つまりは一層大きな善をもたらすということは、実にたびたび起きていると言わねばなるまい」（ライブニッツ著作集6 宗教哲学「弁神論」上）佐々木能章訳、工作舎、一九九〇年、一三〇頁）。医者メス、砂糖菓子、陰影に富む絵、ちよつと耳をそばだてる音楽。しかしこれらは「死」

の実存に釣り合っていない。

- (22) ルター『受難節第一主日後月曜日の説教』『ルターの説教②』岸千年編訳、聖文舎、一九八六年所収、三四―三五頁。訳一部変更。

- (23) 「言葉」こそ、神学の最大テーマである。神の言葉の問題。しかし本論考では、この問題に立ち入ることはできない。なお以下の拙稿参照。「初めにことはあった―ルターのロゴス論」『ルター研究』第3巻、一九八七年、「これは私の体である―説教論のためのテーゼ」『テオロギア・デア・コニア』32号、一九九八年、「ルターと翻訳―翻訳の神学のために」『ルター研究』第16巻、二〇一九年。

- (24) M・ルター「農民の殺人・強盗団に抗して」『ルター著作集』第一集6巻、渡辺茂訳、聖文舎、一九六三年、三七頁。

- (25) D・ボンヘッファー「ユダヤ人問題に対する教会」『ボンヘッファー選集（告白教会と世界教会）』6巻、森野善右衛門訳、新教出版社、一九六八年所収。

- (26) D・ボンヘッファー「十年後―一九四三年に向かう年末に書いた報告」『ボンヘッファー獄中書簡集』村上伸訳、新教出版社、一九八八年所収、六頁。訳一部変更。

- (27) 同上、一二頁。

- (28) D・ボンヘッファー『ボンヘッファー選集（現代キリスト教倫理）』4巻、森野善右衛門訳、新教出版社、一九六二年、二七二頁。なお、E・ベートゲ「ボンヘッファーにおける罪責の問題」日本ボンヘッファー研究会編訳『ボンヘッファーの世界』新教出版社、一九八一年参照。

- (29) K・バルト『教会教義学―創造論Ⅳ／3』吉永正義訳、新教出版社、一九八一年、一五六頁以下。

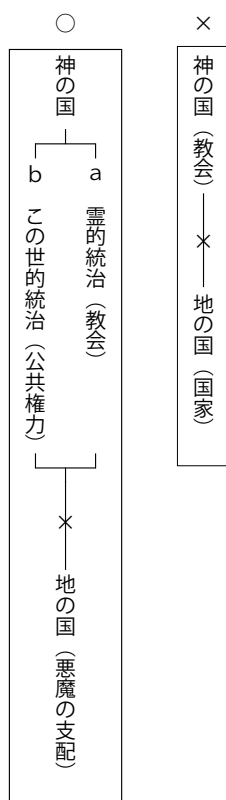
- (30) 同上、二六〇頁。

- (31) 同上、二六二頁。

(32) D・ボンヘッファー『ボンヘッファー選集（現代キリスト教倫理）』4巻、前掲書、二七二―二七三頁。

(33) M・ルター『この世の權威について』『ルター著作集』第一集5巻、徳善義和訳、聖文舎、一九六二年、一四〇頁、一四八―一四九頁。

(34) ルターの『二王国論』を図示しておこう。



なお拙稿「ドゥフロウのタイポロギーについて―ルターの『二王国論』再考」『テオロギア・デアコニア』33号、一九九九年、『神の仮面―ルターと現代世界』第一章「二王国論とポストモダン」リトン、二〇〇九年参照。

(35) 注の(5)をみよ。なお拙稿「フクシマのモーツァルト」『ルターの脱構築』所収、リトン、二〇一八年）参照。